



ピンチを脱してきた皿山

— 議論を闘わせて良策を見つける —

有田は今焼き物が売れないという人がいます。でもこれはなにも有田に限ったことではなく、日本全体の消費が落ち込んだことが一番の原因ではないかと思われる。

有田の歴史のなかで過去何度となく有田は存亡の危機をくぐり抜けてきました。まず思い浮かぶのが寛永14年(1637)の窯場の統合です。この時は藩の決定に従うしかなかった皿山の人々でしたが、その後の歴史をみるとなかなかどうしてしたたかに生き抜いてきているようです。明和元年(1764)ごろ「近年値段不景気につき山中困窮」におよんでいるし、天明2年(1782)、大風雨が襲ったあと飢饉が続く皿山でも打ち壊しが起こり、このころは焼き物も不振で山中が不景気におちいりました。文化7年(1810)の達帳によれば黒牟田山が年ごとに難渋してきて、これ以上藩に借銀を申し込むことは無理だったので窯焼きと商人から「講」によって資金を出させ、陶器方からは米箆(こめはず・米切手、米の交換手形)を貸しだす方法で救済しようとした。ピンチのたびに藩から借金

をしたり、住民自身も食事をつましくしたり晴れがましいことを控えたりと官民一体となって努力をして乗り越えたのです。

その後明治以降もさまざまな困難が皿山を襲いましたが、そのつど全町をあげて互いに議論を交わし策を練ってきました。そのような歴史をみていると皿山の人々は議論好きともいえそうです。ここに一枚の写真があります。昭和27年1月「有田陶業を語る座談会」とあり、出席者の顔ぶれは当時有田陶業界を支えていた面々ですが、残念ながらほとんどが故人となっています。神近亨一、久富二六、永竹威、家永敬三、山本頼一、江上房右衛門(房次)、二宮都水、初代奥川忠右衛門、県有、犬塚長作、川浪養治、池田忠一の各氏。その座談会の内容は久富二六氏が著した「仁露滴滴」にくわしくあります。

窯に石炭を使い始めた時のことや、細工人の修業の話、新しいデザインのこと、陶工の教育や美術館の設置など現在でも十分通用する内容です。逆に言えば有田の実情は今も昔もそう変わらないものといえるのかもしれませんが、しかし、実情をさらけだして本音をぶつけ合う伝統はしっかりと受け継がれており、それが有田の持つたたかさでもあるといえそうです。



皿山の不景気については有田町史商業編Ⅰ、陶業編Ⅰに詳しく掲載されています。また、資料として「皿山代官旧記覚書」に代官所と皿山の人々が交わした文書があります。

久富二六氏が著したものは上記のほか「わが家の歴史」があります。いずれも私家本で市販されていませんが当館に所蔵されていますので、もっと詳しく知りたい方はお出でください。

皿山 夏 No.38

有田町歴史民俗資料館・館報

発掘調査

裏のうら

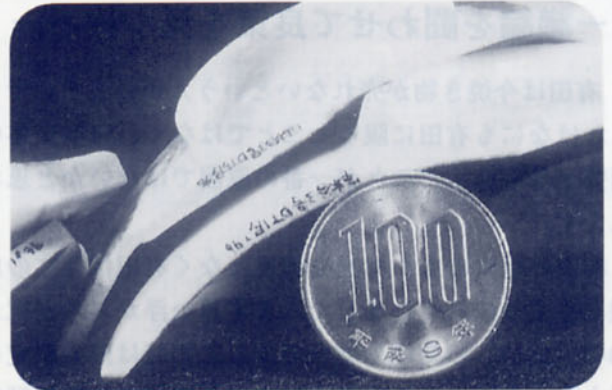
PART 2

前回は、発掘調査の現地調査編でした。現地調査が終わると、とりあえずほっとしますし、やり終えたという充実感もあります。しかし、これだけで終わりではありません。資料を持ち帰って整理しなければなりません。実はこの整理作業の方が期間も費用もかかるものなのです。今回はこの整理作業の主な工程を順を追って紹介いたします。

水洗い→注記→接合→実測→写真撮影→報告書作成

1. 水洗い (みそあらい)

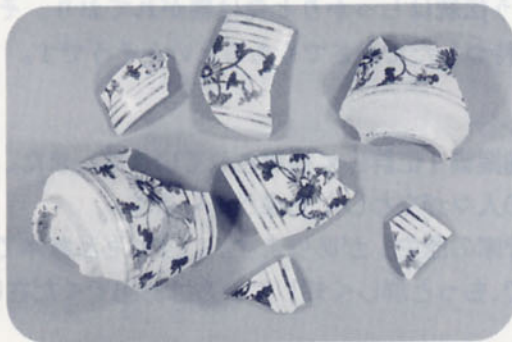
遺物の整理作業はまず水洗いから始まります。道具はタワシや歯ブラシなどを使っています。洗った後は干してよく乾燥させます。よく乾燥させていないと、後でカビが生えてきたりしてしまいます。水洗いは簡単な作業のように見えますが、細心の注意が必要な作業でもあります。遺物は出土した場所ごとにビニール袋に入れてありますが、違うビニール袋の遺物を決して混ぜてはいけません。一つでも混じると、資料価値が失われる時もあります。遺物というものはどのような状況で出土したかということが大切なのです。それがわからなくなると貴重な考古資料がただの古い焼き物の欠片になってしまいます。資料とベンジャラギレの分かれ道です。



割れ口に注記をした陶片

2. 注記 (ちゅうき)

遺物一つ一つに遺跡名、出土地点、出土年などを書き込んでいきます。通常、面相筆と墨を使って、破片の割れ口や目立たないところに小さく書いていきます。かなり目の疲れる作業で、器用さが要求されます。これまで整理作業をしてもらった人たちの中には米粒にも楽に字が書けるだろうと思える人が何人もいます。また、最近では吹付式の注記機械も登場しています。



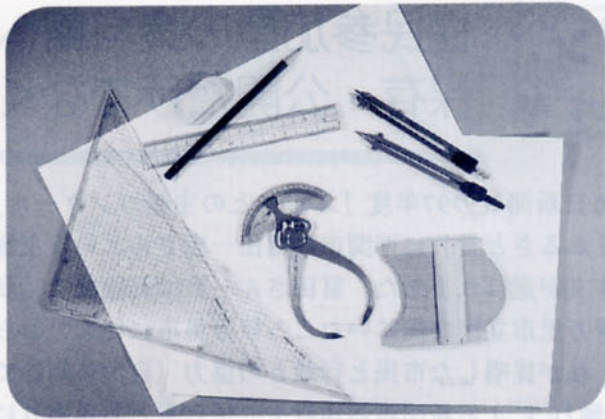
↑接合前

↓接合後

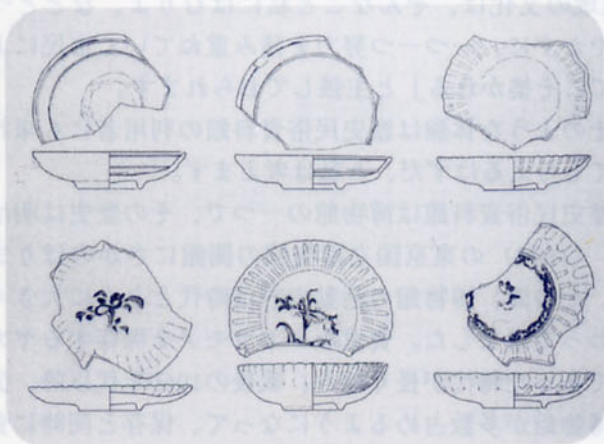


3. 接合 (せつごう)

破片と破片をつなぎ合わせて、元の形に復元していく作業です。中にはほぼ完全に復元できるものもあります。ジグソーパズルに似ていますが、ジグソーパズルと違うところは、全て揃っているかどうかかわからないこと、同じように見えても完成品が一つとは限らないことです。つまり、接合する遺物は、いくつも似たような種類のジグソーパズルを混ぜ合わせて、その中のピースを無作為に抜いたような状態になっています。



実測に使う主な道具



実測図にペン入れしたもの



完成した報告書

4. 実測 (じっせく)

復元した遺物の形を方眼紙に描いていく作業です。例えば、丸碗の場合は、真横から見た形を計測しながら描いていきます。そして、右半分には器の断面図、左半分には表面図を描きます。ただし、これは国によっても違います。例えば中国などでは左半分に断面図を入れています。また、実測ではいろいろな小道具を使います。三角定規や直定規以外にも厚さを測るキャリパー、器の表面の形を測るマコー、距離を測るディバイダーなどを駆使します。

5. 写真撮影 (しゃしんざつえい)

次は写真撮影です。遺物の種類によっては、実測の前に写真撮影することもあります。遺物をいくつかの方向から撮影していきます。例えば、丸碗であれば、横・上・下の三方向から撮影します。場合によっては一部分の拡大写真も撮ります。

そして、撮影した写真をカードに貼り、遺物台帳カードを作っていきます。



遺物台帳カード

6. 報告書作成 (ほうこくしょざくせい)

いよいよ報告書作成です。遺物の実測図にペン入れし、現地調査で記録した遺構の図面にもペン入れします。そして、完成した図や写真とともに、発掘の調査経過や内容を文章にして1冊の本を作り上げていきます。

報告書が完成すれば、発掘調査は一応終了となりますが、研究したり、展示公開する作業がまだまだ残されています。



住民参加型の資料館へ 保存・公開だけでなく

こんな写真 ありませんか。

写真の中央に見える建物は昭和9年5月26日に新築落成した「外尾尋常高等小学校（現在の有田中部小学校）」です。有田駅の裏側に位置し、現在の佐賀県陶磁器工業組合一帯にあたります。当館では10月の企画展に向け、このような古い写真を探しています。ご連絡いただければお伺いしますので、ご協力をお願いします。

いよいよ発刊！

『おんなの 有田皿山 さんぽ史』

昨年から編集を進めていました『おんなの 有田皿山 さんぽ史』が発刊の運びとなりました。総勢23人の有田のおんなたちが古老の人々に話を聞き、また実際に体験してきたことを文章にしました。この活動の中で「知らなかった有田の一面を見ました、改めて有田の良さがわかりました。」などの声を聞きましたし、今まで陰で皿山を支えてきた有田のおんなたちに光が射してきたのではと思います。

巻頭エッセーには芥川賞作家の村田喜代子さんに、百婆仙をモデルに書かれた初の長編小説『龍飛御天歌』の取材で訪れた有田への思いを書いていただきました。また、蒲原有明が詠んだ『皿山にて』の詩が、実は3回も改作された新たな事実が今回編集をしている中でわかりました。皿山のおんなたちがつくった『おんなの 有田皿山さんぽ史』にご期待ください。

寄贈資料の紹介

- ◆古 陶 磁 10点 長崎県 大八木雄二様
 - ◆旅行カバン等 8件 大 樽 手塚 信雄様
 - ◆羽釜等 3件 泉 山 筒井 繁代様
- この他来客用として深川製磁より茶器セットをいただきました。

ありがとうございました。

毎日新聞社の97年度「ふるさとの主張コンクール」の「ふるさと賞」に下関市の富田一恵さんという主婦の作文が選ばれました。富田さん一家は転勤族で、私が伊万里市立図書館にいたころ伊万里市に住んでおられ、私が提唱した市民と行政との協力（自治体用語で「協働」）による新図書館建設や、子どもとお年寄りに本を読み聞かせるボランティア活動に参加しておられました。受賞作はそのころの充実感を述べたもので、「地域の文化は、そんなこと私にはむりよ、などとおぼやかずに、一つ一つ努力を積み重ねていく市民によってこそ築かれる」と主張しておられます。

そのような体験は歴史民俗資料館の利用者にも味わってもらえるはずだ、と私は考えます。

歴史民俗資料館は博物館の一つで、その歴史は明治5年（1872）の東京国立博物館の開館にさかのぼります。その間、博物館の活動内容は時代とともに大きく変わって来ました。貴重なタカラモノを保存するヤカタであった時代が長く続き、戦後の1960年代以降、公立博物館が多数占めるようになって、保存と同時に資料の公開に独自性を競うようになりました。館や学芸員の力量が問われる時代、淘汰の時代に入ったのです。そして10年ほど前からは、生涯学習に熱心な神奈川県川崎市、平塚市などで、保存や公開と合わせて市民参加型の博物館像を求める動きが高まりました。「モノシリを育てることが博物館の目的ではない。個人よりもグループを。市民と共に、地域が求める課題に沿った資料を整備し、その価値を発見し、地域文化を高めていくのが博物館の使命だ」との考えによるものです。

私もその方向を模索したい。主婦をライターにした「おんなの有田皿山さんぽ史」の発刊。「わが家の一枚」による歴史写真展。古文書教室の受講者による川内家（大樽）文書の刊行計画など、その線からの発想です。知識や教養を個人の中にとじこめずに地域に展開する。そのための住民と行政との「協働」。住民参加の運営。博物館の未来はそこにかかっていると思うのです。（森田）

季 刊『皿 山』

通巻38号（平成10年6月1日）
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1
☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185